

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

Fate / chaos

【作者名】

逸環

【あらすじ】

連続殺人犯、『雨竜 龍之介』。

殺しにマンネリ化を感じてきたある日、実家の蔵にあった古文書を見つけたから、儀式殺人を繰り返す彼の手に現れた三角の痣。

そして、顕れた英霊は三人もいて……………。

この小説の主人公は、『魔法世界の混沌』と同一です。

それでもかまわないという方は、どうぞぞー！

S u m m o n s .

明かりの点いていない、とあるマンションの一室。

そこで、一人の若い男が足を動かさず、何かをしていた。

「満たせ、満たせ、満たして満たせ。繰り返す都度に四度……あれ？五度？ただ満たされる時を破却する、だよなあ？」

その手にある、一冊の本。

それを見ながら、その続きを確認する。

「うん。満たせ、満たせ、満たして満たして満たせつと。はいー、今度こそ五度ね。えいー！」

本来ならば、至極真面目にするべきことなのだろうが、いたって適当にそれ続ける。

「……………うん？」

点けつばなしのテレビから流れる、ニュースに意識を向ける。

それは、最近犯行を続ける連続殺人犯のことを報道するものだった。

「ちよーっと、ハメを外し過ぎちゃったかなあ？」

男性が座るソファーに、後ろから体重をかける。

すると、男性の身体が横に倒れ、ソファーから落ちる。

そう、男性は既に事切れていた。

「悪魔って、本当にいると思うかい？坊や？」

男は、部屋の隅で縛られて転がされている少年に声をかける。
少年の瞳は、恐怖に染まっていた。

「新聞や雑誌だとさあ、よく俺のこと悪魔呼ばわりしてんだよね」

「でもそれってさあ、もし本当に悪魔がいたら、ちょっとばかし失礼な話だよな？そこんとくすつきりしなくてさあ」

「ちゅーすー」雨生 龍之介『は、悪魔でありまーす！なーんて、名乗っちゃって良いものか」

「そしたらこんな物見つけちゃってさ」

「うちの土蔵にあった、古文書？見たいなやつんだけどさ、どーも、うちのご先祖様、悪魔を呼び出す研究をしたみたいなんだよね」

「そしたらさあ、本物の悪魔がいるか、試すしかないじゃあん？」

「でもねえ、もし万が一、本当に悪魔が出てきたらさあ、何の準備も無く茶飲み話だけってのも間抜けな話じゃあん？」

そこまで一気にまくし立て、謝る様に片手で拝みながら言う。

「だからねえ、坊や。もし悪魔さんがお出ましましたらさあ、一つ殺されてみてくれなあい？」

「ッ?!んんんーっ!!!んんんっ!!!」

少年が、恐怖に叫ぶ。

それを見た雨生は、盛大に座っていた椅子をがたがたと揺らし、笑い出す。

「アハハハハハハハハ!!! 悪魔に殺されるって、どんな気分なんだろうね!? 貴重な体験… イツテ」

その手に現れた、模様のように見える痣。

「……………何だ? これ?」

その時、突如魔方陣が輝く。

放電と発光が収まる頃、現れた人影は、

「ニサーヴァント、キャスターがここに現界した。問おう。お前（貴殿）（貴方）が俺（私）のマスター（召喚者）か? て、え?」

黒髪に東洋系の容貌をした男に、金髪の可愛いとも言える美女。そして、

「……………デメキン?」

「とつとつギョロ目どころかデメキンとは?！」

怪しい風貌の、大柄なギョロ目の男だった。

「え? 三人?」

「……………どつとつとつでしよつか?」

黒髪の男がと、女が疑問を口にする。

「マスターの召喚の呪文が、適当だったのでは？」

「……………うん、すごく適当にやった。何回か間違えたし」

ギョロ目がそれに対しての考察を述べ、龍之介がそれを認めた。

「うおっ。マジかよマスター」

「……………不安しかありません」

「同意」

「て言うか何コレ?!全然COOLじゃないよ!?!」

呆れる三人と、何がなんだか分からない龍之介。

まあ、当たり前だろう。

これは、一人の快樂殺人者なマスターと、三人のキャスターたちのお話。

Wait a minute .

「はい。まったく状況が読めていないマスターのために、説明ターイ
△」

「……………誰がしますか？」

「では、不肖このジル・ド・レイめが」

「いやいや！その前にあんたたち誰だよ?! 悪魔?!」

失敬な。

哀れな子羊たちを導く神父に対して悪魔とは。

失敬な。

「俺は神父。悪魔の敵側だよ」

「……………私は、この人の妻です」

「……………この人たちの後でなんですが、悪魔崇拜をしていた過去
があります」

よし。

ギョロ目、後でお前はお仕置き（石抱き）だ。

「そうじゃなくて！あ、俺は『雨生 龍之介』。職業はフリーター。趣
味は人殺し全般。子供とか若い女とか好きです」

「んんー!!」

おい。

仮にも神父の前で、趣味は人殺しだったよこの人。

そしてその子供、うるさい。

なんか縛られてるけど、その年でそのプレイはちょっとアレ過ぎるぞ。

「あー。とりあえず今の自己紹介で契約は成立しちゃったけど、聖杯戦争がなんだか分かってる？ 龍之介？」

「聖杯戦争？」

だよー。

そりゃ分からんよねー。

そついう顔してるもん。

「まあ、聖杯戦争の説明をする前に、俺たちの自己紹介しちゃうか」

「んー！」

だからうるさいって。

「水無月 六禄」。職業は神父。趣味は嫁とゆっくりすること。クラスはキャスターだ」

「んー！んー！」

「水無月 ジャンヌ」です。職業は専業主婦です。趣味は……、六禄さんとお喋りをする事です。クラスはキャスターです」

「んー！んー！んー！！」

「そうですねえ。「この時代で通りの良い呼び名といえば……………」。んん！ではひとまず、青髭とでも名乗っておきましょうか。趣味はリュウノスケと同じですね。クラスは「おい」……………何でしょう？ムロク？」

はっはっは。

まったく、「」のギョロ目ときたら。

「趣味はリュウノスケと同じですじゃねえだろう？ああ？」

ガシッ

ゴキッゴキヤラッ！

「ああああああああああああああああああああ……………」

「う、うわあ？！青髭の旦那の顔がどんどん変形していく？！」

「俺の握力は、水の入った壺を持ち上げようとしたら壺が碎けるくらいだ」

「それ、とんでもない数値だよね？！」

だろっつね。

いやはや、俺も気がついたら、師匠と同じ領域にいたよ。

「……………あの、少し気がついたことがあるのですけど」

「ん？なんだ？」

ジャンヌが、何かに気付いたらしい。

「……………私たち、三体同時の使役ですが、どうも一人分の魔力を三分の一づつにして現界しているみたいです」

「マジか。どつりで龍之介がピンピンしているわけだ」

本来ならば、サーヴァントを三体も使役してしまえば、魔力の枯渇で無事でいられるわけがないのだが。

なんともエロな。

「……………でも、その分ステータスも三分の一になっている可能性が」

それはヤバイ。

俺たちキャスターだから、即効で消されてしまっじゃないか。

「……………まあ、誰かが霊体化すれば、余剰分の魔力が他の人に分けられるはずですけど」

「よし。基本方針は決まった」

「いやーその前に旦那を離してあげなよぉー！」

あ、ギョロ目を掴んでいたのを忘れてた。

ま、声も出なくなっただけだし、いい加減離してやるか。

パッ

ドサッー

「……………ジルさん」

「…お、おお……………。せ、聖女よ……………」

ジャンヌがしゃがみこんで、倒れ臥すジルに声をかける。

「……………自業自得です」

「グハアッ!」

「おおっ。我が嫁ながら、追い討ちをかけるのに容赦がない」

しかしジルよ。

そのベコベコの顔面で、なぜ死ななかった？

「……………んんんんん」

ん？

どっした、龍之介よ？

「COOOOOOL!!!超COOLだよあんた！聖杯だかなんだか知らないが、とにかく俺はあんたに着いて行く!」

……………え？

なんか、手を熱烈に握られて、すっごく良い笑顔でなんか言われてんですけど。

「いやいやいやいやー何で?」

「その死んでそうで死んでいないその感じ！死ぬ一歩手前なのに生き

ている！死んでいるのか生きているのか分からないその感じ！最高だよ！超COOLだ!!俺が求めていたのは、そういうのなんだ!!」

……………これは、ジエネレーションギャップというものなのか？

まったくこいつの感覚が理解できん。

と言うか、お前は快樂殺人者じゃなかったのか？

死んでないぞ、これ？

「んんん————!!!」

あ、子供のこと忘れてた。

S·i·g·h·t·s·e·e·i·n·g·

で、一気にサクッと時間は跳び、

「ありゃ、セイバーとランサーかな？」

「……………使用する武器から考えて、そっだと思います」

「兄貴、何あれ!? 超COOLじゃん！」

「龍之介うるさい」

「……………私が認識阻害の魔法を使っている意味が、まったくありませんね」

ただ今、倉庫街での決闘を見物真っ最中。

ちなみに、コンテナの上にビニールシートを敷き、お弁当持参(ジャン又謹製)できている。

何で都合よく弁当を持っているのだが、冬木を散策がてらピクニックへという気分で用意してきた物を、サーヴァント同士が戦っている気配を感じたため、見物ついでに今こうして食べているというわけだ。

ジル？

あの殺人現場を引き払った後に潜り込んだ拠点で、さすがにほっとくわけにはいかなかったあの子供のお守りをしてるけど？

まあ、正直人選をミスったとは思って、とりあえず、釘は刺しておいたんだが。

「ぐ…………ぐおおお……………」

「……………大丈夫？」

「…ぞ、最期の縛り首に比べれば……………」

その頃拠点では、重ねた両手にリアルに釘を刺されて、壁に固定されているギョロ目がいた。

「なあ、ジャンヌ」

「……………なんですか？」

「俺、ランサーって名乗ってやるのかな？」

自分のクラスを隠すという意味もあるが、あいつらを惑わし、驚かせるのが目的だ。

「……………良いんじゃないでしょうか？」

「兄貴。よく分かんないけど、とりあえずそれやるっつ」

……………「これ、やっぱりマスターハズレだわ。

あ、あいつら真名暴露してやがる。

「へー。あいつ、『フィオナ騎士団』の『輝く貌』、『ディルムッド・オ
ディナ』なのか」

「……あちらの私に似た人は、かの『騎士王』、『アーサー・ペンドラゴン』みたいですね」

「姐さん。アーサー王って、男じゃなかったの？」

「……歴史の上では、事実と性別が違っただなんて、良くあることですよ？ 実際、私たちが仕え、『勝利王』と呼ばれたシャルル王も女性でしたし」

「おい、俺は仕えてないからな。勘違いするなよ、龍之介」

「分かったよ、兄貴」

あー。

そういえば、『フランスス・ドレーク』も女だったなあ。

まあなんにしても、ランサーの宝具は『破魔の紅薔薇』と『必滅の黄薔薇』。

セイバーの『約束された勝利の剣』と、名前は知らんが『約束された勝利の剣』らしき物を見えなくさせてる宝具。どっちも、厄介もいところだ。

て、ん？

空から雷鳴と稲光？

て、ありや!?

空を駆ける、牛が引く戦車だとお?!

その手綱を握っているのは、赤毛の大男。

そして、その後ろで必死にしがみつき、ジェットコースターもあわ

やという顔をしている、中性的な少年。

……………なぜだろうか？

あの少年を、無性に真のヒロインと呼びたくなるのは。
とりあえず、ジルと会わせてはいけないことはよく分かる。

「……………同感です」

「ああーあいつを殺してみたい！絶対COOLだよー！」

おい、ここにジルの同類がいるぞ。

誰か、こいつをまともにしてくれ。

あ、ちょい訂正。

「こいつとギョロ目をまともにしてくれ。」

「ぶえつくしゅー！あああああ!!?釘がずれて痛い!!!」

「……………ギョロ目のおじさんって、ギャグキャラ？」

思っただけでも、噂は成立した。

Charm .

「……………あ、そういえば言い忘れてましたけど」

「ん？何だ？」

セイバーとランサーが決闘をライダーに邪魔され、なんか言い争ってる中、ジャンヌが何かを伝えてくる。

「……………私、先程からずっと、ランサーから魅了（チャーム）の魔術をかけられています。おそらく、あの泣き黒子の効果でしょうね。……………まあ、スキルで打ち消しましたけど」

……………ほっ？

なるほど。

それはつまり、

「うわ?! 兄貴が消えた?!」

「……………あそこです」

「え？」

ジャンヌが指差したのは、ライダーが間に入ったため休戦中のセイバーとランサーのもとだった。

しかし、龍之介の目には分からない。

「いやいや、いないじゃんか姐さん」

「……………見ていてください」

ぼんっ

と、突然現れ、後ろからランサーの肩に置かれた手。
それはもちろん、

「つまりお前は、今すぐ死にたいわけだな？前髪ワカメ」

「「「前髪ワカメ?!」」」

俺の手だった。

「と言っか、何で俺が死なないといけない?!」

ほっ?

自分の罪に、覚えがないと?

「だったら、そのまま死ね」

すぐに刺せるよう、短く持っていた槍をランサーに向ける。

「だああ！ちょっと待てそこの黒いの！」

「……………なんだ？赤いの」

手に持っていた槍を、前髪野郎に突き刺そうとした時、ライダーに
呼び止められる。

しかし、その程度で刺すのを中断するとは、俺も丸くなったと言っ
かなんと言っか。

「お前さん、見たとこサーヴァントらしいが、何でそこなランサーをい
きなり殺そうとする？それに、クラスは？」

「前の質問に答えるなら、こいつが俺の嫁に魅了をかけたからだ。後
者の答えは、俺の獲物から察しろと言いたい」

「なに？では、お前はランサーだとも言うのか？ここには、ホレ。そ
こな前髪がランサーと名乗っており、それに相応しい槍捌きを見せて
いたのだが？」

「そつだ。この二槍と新たな主君に誓い、この俺は間違いなくラン
サーとして現界している。そして前髪は止めてくれ」

うん。

そりゃあ俺はキャスター×3の内の一体だからね。

お前がランサーで当然だよ。

そして前髪呼ばわりは止めない。

「まあ、俺のクラスはどうしても良くないか？重要なのは、俺がこの前髪
をぶっ殺すことだ」

「おい、槍使い。ランサーは私と尋常なる決闘をしているのだ。横か
ら手を出すな」

セイバーが何か言ってくるが、

「小娘は黙ってる」

「な!?こ、小娘だと!？」

「俺は嫁に手を出されたんだぞ? 対魔力が高いから無効化したが、俺の嫁に魅了をかけた罪は、死以外では雪がせん」

本当はスキルによるものだが、対魔力と偽っておく。
嘘に嘘を重ねて、相手に思い込みを与えるのが目的だ。

「し、しかし!」

「まあ、待て待て。お互いに、そう熱くなるな」

ヒートアップしてきた俺とセイバーを、ライダーが諫める。

まあ、実際のところ熱くなっているのはセイバーだけで、俺は嘘を吐ける程度には冷静なのだが。

ちなみに、ずっとほっとかかっているセイバーのマスターっぽい女は、なんとなく腐臭がするのは気のせいかな。
もしかしたら、貴腐人なのかもしれない。

「それにしても、セイバー、それにランサーよ。うぬらの真っ向切ったの競い合い、まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余とこやつだけとはあるまい」

「確かに、さっきまで見物していたけどな」

俺がでてきた理由は違うぞ?

あくまでもランサーの抹殺が目的だからな?

「情けない。情けないのう! 冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せつけた気概に、何も感じるところがないと抜か

すか？誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するとは、英霊が聞いて呆れるわなあ。んん!？」

しかしデカイ声。

これが、霸王の軍団に向けられていた声か。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮辱を免れぬものと知れ！」

「うおおおおっっ?!耳があああああっっ
!!!!?」

クソ！

久しぶりに吸血鬼の聴力があだになった！

しかし、そんな呼び声でわざわざ敵が現れてくれるとでも、こいつは思っているのか？

ん？

街灯の上に、金色の霊体化を解除した時のキラキラが？

「我(オレ)を差し置いて、“王”を称する不埒者が、一夜の内に二匹も涌くとはな」

……………なんか、金ぴかの阿呆が来た。

M a d d o g .

「難癖つけられたところだなあ……イスカンドルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

あー。

ライダーの真名は、イスカンドルねー。

しかしあの金ぴか、傲岸不遜もいいとこの唯我独尊っぷりだな。

まったく、人間としてどうよ？

まあ、雑種の辺りは否定しきれんが。

あ、そういえば。

「王を名乗るのは、一人じゃないぞ？俺自身が名乗ったことはないが、『獣王』と呼称されたこともあるし」

「これは、俺の生き様ではなく、能力から呼ばれていたものだが。

「どうでもいい。所詮はお前も雑種だ」

「おおう。辛辣」

「まあまあ。そこまで言っんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？
貴様も王たる者ならば、まさかおのれの威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？雑種風情が、王たるこの我に向けて？」

ライダーの問いに、金ぴかの様子が変わる。
あれは、誰が見ても怒っているのが判る顔だ。
いったい、どれだけ名前を訊かれたのが不愉快だったのだろうか？

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を知らぬと申すなら、こんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

金ぴかの背後に、これまた金ぴかの空間の波打ちが二つ現れ、それぞれから剣の切っ先が出てくる。

セイバーの様に剣を握らないことから考えると、おそらくアレを射出して戦うのだろう。

とすれば、あれはアーチャーか。

まだ射出されていないにも拘らず、あれらが宝具級の力を持つことがわかる。

いやいや。

どんだけもつたいない使い方だよ。

俺がこの場からの離脱を考えていると、

ゴウツ!!

と、少し離れた箇所から、魔力が溢れた。

この感じは、サーヴァントが霊体化を解いたときのもの。

ジャンヌは省くとして、この場に五体ものサーヴァントが集結するとは。

魔力の奔流が収まり、それは現れる。

フルフェイスのヘルメットをかぶり、ライダージャケットを着たそ

れは、一見するとライダーと思える。
しかし、ヘルメットから見える瞳の輝きは、間違いなく狂い違った
狂戦士のもの。

あれは、バーサーカーだな。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだな」

前髪とライダーが、何か話している。

「いったい、誘うって何をだ？」

「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？あれは」

ライダーが、マスターの少年に尋ねる。

マスターであるなら、サーヴァントのステータスを観れる特殊能力
が聖杯より授けられるらしい。

ちなみにだが、龍之介に使わせようとしたところ、使い方が分から
ないの一言で終わってしまった。

「……………それが、よく分からないんだ。こころろステータスが変わっ
て、全然安定しない。ただ、耐久だけはA+を維持し続けてるんだけ
ど」

「なんだあ？そりゃ？」

……………戦力把握ができるかと思ったのに、残念。

まあ、どうつでもいいか。

「どつやら、アレもまた厄介な敵みたいね……………」

セイバーのマスターの呟きに、セイバーが頷いた。

「それだけではない。5人を相手に睨み合いとなつては、もう迂闊には動けません」

まあ、バトルロワイヤルだからねえ。

俺はどの勢力に組する気もないけど、弱っている奴がいれば叩くし、強い奴が相手ならば、他のサーヴァントと共闘してでも倒す。その逆もあるから、バトルロワイヤルは怖いんだ。

あ、アーチャーとバーサーカーの目が合った。

「誰の許しを得て我を見ておる？ 狂犬めが……」

バーサーカーと目が合った瞬間、アーチャーが怒りを顕にした。お前、どれだけバーサーカーが嫌いなんだ。

そして、ライダーを向いていた剣がバーサーカーに向き、

「せめて散りざまに我を興じさせよ。 雑種」

二振りの剣が、射出された。

あれはもう、当たっただろう。

「クラウカヨオ。ソナモン」

……………今、バーサーカーが喋った？

「分体2体解放」

バーサーカーが被弾するかと思った時、その身体から黒い獣が現れ、射出された剣を地面に叩き落した。

……………いやいやいやいや。

まさか、ねえ？

あれは、俺と同じ、

『獣王の巢』？

C l u m p .

今の光景に、その場に居合わせた誰もが息を呑む。
当たり前だろう。

人体から獣が現れ、飛来した剣を叩き落としたのだから。
その獣は今、バーサーカーの内に戻っている。

と言うかアーチャーよ。

お前当然のように宝具ぶちかましたけど、それ凄じい贅沢な使い方だからな？

肉体そのものが宝具の俺が言えた義理じゃないけど。

さて、状況を整理しよう。

まずこの場には、うちの陣営ことキャスター（三分の二）とマスター、セイバーとマスター、ライダーとマスター、ランサーとマスター（奴らの会話から判断）、アーチャー、バーサーカーがいるわけだ。
そしてさらに、それぞれの真名で判っているものが、

セイバー：アーサー王

ライダー：イスカンダル

ランサー：ディルムッド

ということだ。

アーチャーはわけが分からん。

バーサーカーは、先程見せた『獣王の巢』（確証はないけど確実に、そしてかの『混沌の教授』とは明らかに違う格好から考えると、なあ？

「我が宝物を、その汚らわしい畜生の脚で叩きつけるとは」

倉庫街だけでなく、冬樹一帯に轟く咆哮。

それは、金ぴかに張り合うかのようにバーサーカーが解放した、300もの獣たちのものだった。

「う、嘘だろおっ?!こんなものってありかよ?!」

「落ち着け。案ずるな坊主」

ライダーのマスターが叫ぶ。

まあ、だろうなあ。

しかしライダーよ、ずいぶんと豪胆だな。

見ろ。

セイバーとランサーなんて、警戒しまくってるぞ。

「ふん。狂犬如きが、小癩な真似を。ならば」

さらに増える、宝具の群れ。

すげえ。

光り過ぎて、夜が明けたみたいになってる。

「ぐんぐんやらの金色は、宝具の数が自慢らしいが、あのヘルメットの奴相手では意味がないのお」

ライダーが、冷静に考察している。

それはそうだろう。

どれだけ宝具を出しても、その数のアドバンテージを生かしきれないのだから。

まあ、そんなことはどうでもよく、今は正直ジャンヌが心配で仕方

ライダーに同意する。
さて、残った問題といえば、

「「「「
.....
「「「「

動くに動けない、この状況のことか。

E s c a p e .

さて、どうしたもんやら。

とりあえず、この場を離脱したいんだが。

まずはジャンヌと念話で連絡を……………念話？

たしか、パクティオーカードでも、念話ができたよな。

そして、もう一つの効果が……………。

よし、これだ。

【ジャンヌ。俺が合図をしたら、パクティオーカードを使って、俺をそっちに召喚してくれ】

【……………ハア、ハア……………】

【ジャンヌー？】

【……………あ、いえ。分かりました】

……………なんか引つかかるが、まあいい。
じゃあ、

パンツッ！

「そら行け牛公！」

「ブモオオオオツツ！！」

「わわっ?!」

「ぬおっ?!」

ライダーの牛の尻を叩いて、バーサーカーに突進させる。

まあ、ライダーはともかく、そのマスターには言っておこう。

「わり」

「謝る気ないだろお前えええっつ!!」

ククッ!

当たり前だろうが。

精々足止め頑張ってくれ。

「ククッ!ナルホドネエ」

「しょうがないのう。AAAALaLaLaLaLaiie!!」

剣を抜いたライダーが、バーサーカーに全速力で突っ込む。

ライダーが全力なのをバーサーカーが把握し、その手をかざすのが見えた。

『『混濁ノ壁』』

分体400の結束をもって作る、俺の使えるうちで最硬の守りの壁。

それを、バーサーカーが使用した。

つまり、

「【今だ!】」

俺の体が、光に包まれる。

逃げるのには、絶好のタイミングということだ。

で、元のコンテナの上に召喚されたわけだが、

「……………この血は何だ？」

なんか、コンテナとジャンヌの顔（鼻より下）が、血で真っ赤になっていた。

「……………戦闘の余波で、ダメージを受けたんです」

うん。

嘘だな。

「龍之介」

「ヘルメットの奴が動物をたくさん出した時にさあ、急に姐さんが……………六禄さんが、二人。…前と、後ろから」って呟いたと思ったら、COOLな鼻血大噴出を」

「……………ジャンヌ」

「……………」

顔を真っ赤にして、俯くジャンヌ。

やべえ、凄く可愛い。

でも、その鼻血って、妄想が爆発した結果だよな？

しかも、そのプレイって、結構特殊な気がするんだけど？

「とりあえず、今夜頑張ろうか？」

「……………はい」

ああ、もう。

可愛いなあ。

「兄貴たちー。そういうことは、俺がない時にやってくれない？」

あ、ジャンヌに夢中で、龍之介の存在を忘れてた。

〈Sideバーサーカー〉

あの野郎おおっつ!!

あの光って、あれだよな!?

パクティオーカードを使った、召喚の時のやつだよなあっ!?

おそらくだが、俺とあいつは根本的な部分は同じはず。

だとすれば、ジャンヌ以外と契約はしないはず。

それなのに、パクティオーカードの召喚機能で転移した。

つまり、あっちのジャンヌは現界しているということか？

「アアアアアアアアアアッッッ!!!」

「ぬおっ?!急に魔力が増幅しただと?!」

何でこっちのジャンヌは現界しないんだよおおっっ!?

↳Side雁夜↳

「バーサーカーの『狂化』のランクが勝手にDに上がった?!」

マスターである俺に、パスを通して伝わったバーサーカーの情報。いったい、あいつに何があった?!

?!
というか、ランクの上昇は俺の意思で行われるんじゃないのか

「…女、じゃな。ほれ、お前も桜や禅城のために」

「黙れ蟲爺」

何を言い出すんだ。

この、腐れ外道片足棺桶の蟲爺は。

……でも、女、か。

………葵さん。

S u m m o n s S i d e B e r s e r k e r .

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし！汝、狂乱の檻に囚われし者！我はその鎖を手繰る者!!」

『始まりの御三家』の一つ、間桐の邸宅の地下に当たる蟲蔵では、今まさに、サーヴァントを喚び出さんとしていた。

召喚者の名は、『間桐 雁夜』。

その半身は、魔術師として出来損ないのその身を、魔術師として仕立て上げるために刻印虫による改造を施した結果、人目に触れさせられないほどの有様となっていた。

召喚のための呪文を一小節唱えるたび、その顔の内を刻印虫が這いずり回る。

「汝三大の言霊を纏う七天！抑止の輪より来たれ！天秤の守り手よ!!」

呪文を全て唱えた時、膨大な魔力が召喚陣から吹き荒れ、それは顕れた。

「……………や、やった」

そのことを確認した時、無事にサーヴァントを召喚できたことに雁夜は安堵した。

本来ならば、ここで名前の交換をすることで契約が完了するのだが、雁夜が召喚したのはバーサーカー。

理性無き狂戦士として召喚された者に、言葉は話せない。

だから、雁夜もそのまま疲労に任せ倒れるくらいのつもりでいた。

しかし、

「バーサーカー、ココニ召喚サレタ。才前ガ俺ノマスターカ？」

「?!」

口を利くはずのないバーサーカーが、はっきりと喋ったのだ。これには雁夜と、その父『間桐 臓硯』も驚いた。

「あ、ああ。そつだ。雁夜つていうんだ。よろしくな」

驚きながらも、雁夜が返答する。
すると、

「ヨシ、コレデ契約ハナサレタツ、トオツ!!」

バーサーカーの拳が、召喚者である雁夜に振るわれた。

（Sideバーサーカー）

「ぶぐうっ」

と、殴った雁夜が吹き飛んでくが、そんなことでは済まさない。
なぜなら、

「600年ぶりニ、ヨウヤク嫁ト会エタト思ツタノニ。テメエノセイデナアッ！」

『座』で再開を果たした直後に召喚しやがって！

召喚される瞬間に、召喚者をぶん殴るって決めちまったるうが。

「才前ノ罪ヲ悔イナガラ死ネエッ！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！今そやつに死なれるのはまずいっ！」

小さい爺が、俺を制止する。

だが、

「ソナナコトハ知ルカアッ！」

その制止を振り切り、召喚者に追撃をかけようとする。

その拳が、弱りきった男に当たろうといつとき、

「おじさん、酷いことしないでー」

一人の少女が、召喚者の前に立った。

むっ、これでは殴れん。

で、ちょっとした後リビングに集まった。

「「本当に、すまなかった」」

召喚者と俺が、同時に頭を下げる。
いや、こんな小さい子のために、ねえ。
お兄さん、泣いちゃいそうだよ。

「じゃ、アラタメテ自己紹介ダ。バーサーカーノサーヴァント、『水無月 六祿』ダ」

「お前のマスターになる、『間桐 雁夜』だ」

「その父の、『間桐 臓硯』じゃ」

「…『間桐 桜』です」

はいはい。

間桐さん一家ね。

「ところで、なんでバーサーカーなのに、喋れるんだ？」

雁夜が訊いてくる。

まあ、当然の疑問だな。

「マスターノ透視カラ使エ、ト言イタイトコロダガ、ソウモイカナイ人間モイルコトダシ、俺カラ説明シテシマオウ」

そう、前置きしておいてから、

「俺ノ伝承ニヨリ、スキル『狂化』ハ『段階狂化』ニ変ワツテイルカラダ」

サクッと真実を告げた。

徐々に自我を失い、ただの混沌になったという俺の伝承が、スキル

『段階狂化』として現れたのだ。

『『段階狂化』とは、どんなスキルなんじゃ？』

「早イ話ガ、マスターノ任意ニヨリ、ランクE〜Aマデ狂化ヲ進行サセ
ルスキルダ。マア、一度狂化ノランクヲ上げタラ、ソレ以下ニハデキ
ナイトイウ、デメリットハアルガナ」

「それは、また……………」

つまり、今はまだ狂化のランクがEだから喋れるというだけの話だ。

「トコロデ、雁夜カラノ魔力供給量ガ少ナクテ、ドウシヨウモナインダ
ガ」

「この量だと、俺の肉体の維持でいっぱいいっぱいではないだろうか。

ただでさえ、俺は他のサーヴァントに比べて燃費が悪いってのに。

「それに関しては、どうしようもないのぉ」

「……………不甲斐ないマスターですまない」

「シー、マア、気ニスルナ。手ナラアル」

「「え？」」

俺だからできる手ではあるがな。

「生前ノ俺ハ、封印術ニ長ケテイタ。ソノ封印ヲ維持スルタメノ手段

トシテ、土地カラ魔力ヲ汲ミ上ゲルタメノ術式ヲ作ツテイル。ソレヲ
応用スレバ、俺ヲ動カス上デノ支障ハナクナル。ドコカニ、丁度良イ
霊地ハナイノカ？」

『ブレイカー ケージ・オブ・エデン
自己封印・永年氷棺』の起動と維持に必要な魔力を『魔法世界』か
ら汲み取っていた術式を使えば、そこそこの霊地さえあれば活動に支
障がなくなるはずだ。

「それならば、柳洞寺はどうじゃろうか。あそこは、この冬木でも最高
の霊地じゃし」

「ジャア、ソレデ」

さて、術式の準備と、出かける準備をするか。
と、あれは。

「雁夜」

「なんだ？バースーカー」

「アレ、貰ッテモイイカ？」

「…俺はもう使わないから別にいいが、何に使うんだ？」

「今時ノ格好ヲシテ、真名ヲ判リ辛クスル」

俺が雁夜から貰った物、それはフルフェイスのヘルメットだった。

……後でライダージャケットでも買うか。

龍之介。

お前が生身の人間だったからやらなかったが、本来ならばお前にもやっただぞ？

口には出さないが。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「とりあえず、ここから拠点を変えるぞ」

「えっ?!」

「……………えーと、着替えと歯ブラシは持ったし、お財布に保険証（龍之介のもの）、後持って行った方がいいものは」

うん、その驚きは俺も当然だと思っ。

しかし、さすがジャンヌ。

俺と旅をしていただけ、何をすれば良いのかが分かっている。

「いや、もしかしたらどっかの使い魔かアサシンかに着けられてたかもしれないし。ヤサを変えないとガチでヤバイ予感がする」

「えーと、証拠を残さないように、っ」と

「私は海魔を喚び出して、相手の目をぐまかします」

よーし、良い連携だ。

「坊主は、俺が抱っこしていく」

「それは良いのですが、新しい拠点の目星はついているのですか?」

ジルが訊いてくる。

うん。

その疑問は最もだ。

だが、

「心配無用。」「」を拠点にする時に、「コンビニの住宅情報誌を読んで、よさげな物件を見繕っておいた」

「…用意がいいですね」

当たり前だ。

そもそも、こんな犯罪者の隠れ家っぽいところに、何時までもジャンヌを置いておくわけがないだろう。

ちなみにだが、その物件はなかなかの広さの一軒家。

商店街や教会も近く、住む場所としては結構良いところをチョイスしておいた。

昨日のうちに、龍之介の名義で買って置いて良かった良かった。

金？

銀行振り込みって、ハッキングすればいくらでも金の流れを操作できるから便利だね。

はい、じゃあ準備もできたから移動するぞー。

StatuS Side Casters .

水無月 六祿

クラス：キャスター

性別：男性

身長：176cm

体重：73kg

属性：中立・善

特技：イカサマ・中華料理

好き：ジャンヌ・子供・甘いもの

嫌い：家族に手を出す奴・デイルムツド・バーサーカー

天敵：ジャンヌ・娘・押しの強い女性

クラススキル

陣地作成：B

魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。

自分の体内に使用し、少ない魔力でも効率的に宝具の維持をしている。

道具作成：E

魔力を帯びた道具を作成できる。

が、このランクでは特に何かが作れるわけではない。

日曜大工なら可能レベル。

保有スキル

不二の愛：A

ただ一人を愛し続けた者のみに与えられるスキル。 Aランクな

らば、全ての魅了などの誘惑を打ち消せる。スキルを得る理由となつた者以外に恋慕の情を抱いた瞬間に、このスキルは消滅する。

吸血鬼：A

長い時を生きた吸血鬼に与えられるスキル。魂喰らいを行う際、対象の魔力を十全に摂取できる。

中国武術：A++

中華の合理。宇宙と一体になる事を目的とした武術をどれほど極めたかの値。修得の難易度は最高レベルで、他のスキルと違い、Aでようやく”修得した”と言える。++ともなれば、達人と呼ばれても頷けるレベル。

圏境：A

気を使い、周囲の状況を感知し、また、自らの存在を消失させる技法。極めたものは天地と合一し、その姿を自然に溶けこませることすら可能となる。

筋力：B

耐久：A+

敏捷：B

魔力：C

幸運：C

宝具：D～A

宝具

獣王の巢：A

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1

混沌の固有結界。

原点は月姫に登場したネロ・カオス。

666の生命の因子が混濁し渦を巻く混沌の世界。

内部の生命因子を使い魔の如く使役する。その形状は現界の瞬間に決定しているため、何が出るかは本人にもわからない。しかし、幻想種や小動物といった強弱、種類など、ある程度の決定はできる。666という数はあくまで「因子」であり、それをもって小規模な生命の系統樹を再現しているため、現れる生物の「種類」は666という数以上のもつと多数にわたる（例えば、因子を2つ以上用いた獣を作ることでも可能ということ）。

666の使い魔で武装している、などとも言われるが、獣は発動者と同意であり同位。本来従者である使い魔が、発動者と同格、発動者「使い魔」という存在にもなっている。

普通に殺されても混沌に戻るだけで獣の因子そのものは失われず、発動者の体に戻せばまた復活する。このため、殺すには666の生命因子全てを一気に葬る必要がある。混沌の性質上、それは非常に困難。

自身の体内を固有結界としているため、抑止力による修正を受けないという特性がある。

十二の試練：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

ランクB以下の攻撃をシャットアウトしてしまう上、11の代替生命ストックがある。

さらに一度受けた殺害方法では二度と殺せないなので、本気で倒すにはAランク以上の攻撃かつ12通りの方法で殺さなければならない。（しかし、オーバーキル級のダメージを受けるとダメージ分の生命ストックを消費するようで、この通りにはならない）

无二打：B

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

元々は、師匠であった『李 書文』生前の称号、「二の打ち要らず」＝
「无二打」であり宝具。

正確には、「神槍无二打」。

明確に言つと宝具ではなく、武術の真髄。彼の剛打は、牽制やフェイントの為に放つたはずの一撃ですら敵の命を奪うに足りるものであつたという逸話に由来する。

単純な破壊力ではなく、相手の「気を呑む」ことで相手の感覚の一部を眩惑させ、緊張状態となつた相手の神経に直接衝撃を打ち込むことで迷走神経反射（ショック死）を引き起こし葬る。「気を呑む」という中華の武術の技法は、むしろ仙道に近い。西洋魔術の知識に照らし合わせた場合、自身の魔力を相手に打ち込み、相手の魔術回路を乱してダメージを与える、という解釈になる。

『毒手』とも言い表された。

六合大槍：C

種別：対人宝具

レンジ：1～10

最大捕捉：20人

八極拳の終着点。

八極拳における拳法の全ては、この槍術のためであるとされている。
真名解放はできない。

パクティオカード：D

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1

平行世界における、魔法使いとの契約の証。

念話・召喚・魔力による身体強化など、その性能は多岐にわたる。
物によつては、『アーティファクト』と呼ばれる道具を呼び出すことができる。

主人公のカードには、

称号：生きたがりの混沌

徳性：希望

方位：中央

色調：黒

星辰性：太陽

数字：666

と、記されている。

水無月 ジャンヌ

クラス：キャスター

性別：女性

身長：162cm

体重：47kg

属性：秩序・善

特技：家事

好き：六禄・スイーツ

嫌い：夫に手を出す女性・ディルムッド

天敵：夫・無信心者

クラススキル

陣地作成：C

魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。
というか、主婦としての台所結界能力と化している。

道具作成：E

魔力を帯びた道具を作成できる。
が、特に何ができるというわけではない。

保有スキル

不二の愛：A

ただ一人を愛し続けた者のみに与えられるスキル。

Aランクならば、全ての魅了などの誘惑を打ち消せる。

スキルを得る理由となった者以外に恋慕の情を抱いた瞬間に、このスキルは消滅する。

カリスマ：B

軍団を指揮する、天性の才能。

Bランクであれば、一群を率いるには十分。

聖人：A

聖人として認定されたことを表すスキル。

効果は四種類あり、そのうちの一つを選べる。

今回の現界では『聖骸布の作成可能』が選択されている。

啓示：B

『直感』と同等のスキルだが、『直感』が戦闘に対して使用されるのに対し、目標の達成に関する事象全てを予知する。

が、根拠がないため、他人にはうまく説明ができないという欠点を併せ持つ。

魔法：B

平行世界における魔法を行使するためのスキル。

既存の魔術とは、術式から概念まで、多くのことを違えたもう一つの『神秘』。

筋力：E

耐久：E

敏捷：D

魔力：A

幸運：A

宝具：？（暫定的にD）

宝具

パクティオーカード：D

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1

こつちのがマスターカード。

六禄のに対応している。

以下、未開示。

ジル・ド・レイ

クラス：キャスター

性別：男性

身長：196cm

体重：70kg

属性：混沌・悪

特技：イベント立案・プロデューサー

好き：ジャンヌ・ボーイッシュな少女・フェミニンな少年

嫌い：政治・財政管理・デイルムツド

天敵：六禄・バーサーカー・デイルムツド

クラススキル

陣地作成：E

有って無い様なもの。

道具作成：

宝具使用のために、このスキルは失われている。

保有スキル

気：D

騎士として名を馳せていた頃の、名残とも言えるスキル。

肉体の強化が可能で、Dランクならばそこそこ強化される。

騎士であった頃の姿で召喚されたならば、Bランクにはなった。

筋力：D

耐久：E

敏捷：D

魔力：C

幸運：E

宝具：A+

宝具

プレラーティーズ・スベルブック
螺湮城教本：A+

種別：対軍宝具

レンジ：1～10

最大捕捉：100人

プレラーティーズの記したルルイエ異本

それ自体が魔力炉を持つ魔導書。

ジル・ド・レイ本人は正規の魔術師ではなく、自身では魔術を行使できない。それに代わり、この宝具が魔術を代行する。言うなれば、ジル・ド・レイ専属の魔術師である宝具。所有者の技量に関係なく、この魔導書が大魔術・儀礼呪法を行使する。

特性に合わせ、深海系の水魔の召喚を行う。

ただし、あくまでも「魔導書が行っている召喚魔術」であり、召喚そのものは「宝具の奇跡」ではない。召喚中の魔物は常時魔導書からの魔力供給がなければ現界を保ってはいられず、一瞬でも供給が途切れると消滅する。

なおこの魔道書、ラヴクラフトの創作神話であるクトゥルフ神話に登場する架空の書籍であり、魔神クトゥルーや異界ルルイエについて記述されている。

なお、キャスターが三名いるが、マスターは一括して「雨生 龍之介」。

そのため、魔力の供給量がそれぞれ三分の一になっており、ステータスのランクが表示よりも2ランク下がっている。

なお、Eランクのものに関しては、そもそもこれ以上上下がりようがないので変更はない。

New home life start .

あの後一晩かけ、新居に荷物を運んだりと労働に勤しんだ。

陽動に放ったジルの海魔たちも良い仕事をしてくれ、適当に町をうるつかせて民間人を襲うフリをさせたら、セイバーやらランサーやらライダーやらが面白いように引っかかってくれた。

ちなみに、ジルが出した海魔共はバーサーカーが出したものと思われたいらしい。

「おーし、じゃあ新居最初の朝飯だ」

「……………引越しのお祝いということので、お蕎麦にしてみました」

「おおー私、日本食自体が初めてですよ」

「お蕎麦おいしいよねー」

「あのさあ兄貴。俺だけ隔離されてるってのは、べつべつということなの？」

A 子供が怯えるから。

そんな龍之介をダンボールの卓袱台の前に座らせ、他の俺たちはリビングのテーブルで食事だ。

あ、子供の名前訊いてねえ。

まあ、いいか。

「……………食べ終わったら、ゴミ出ししてきますね」

「じゃあ、こっちは外敵対策をしておく」

「……………お願いします」

まあ、この後の行動が決まったわけなんだが、

「あ、この、むっ」

おもいっきり、箸に苦戦してる奴がいた。

ジルよ、箸を使うのが辛ければ、別にフォークでもいいんだぞ。

「ちゅるるっ。……………美味しいですね」

それに対して、同じフランス人のジャンヌが、箸を使えること使えること。

「兄貴ー、俺もそっちに」

「ダメ」

「みんなの、COOLじゃないよぉ……………」

知ったこっちゃない。

と、どうやら、ジルの海魔に紛れ込ませて放っておいた分体が、ラ
ンサーの根城を見つけたみたいだな。

今夜にでも、襲撃をかけるでしょう。

ククッ！

待っているよ、色男さんよぉ。

Sideジャンヌ

朝ごはんが終わり、ゴミ出しに出ています。

しかし、ご飯の最中に六祿さんが見せた、あの真っ黒な笑顔は何だったのでしょうか？

なんとなく、あのワカメみたいな前髪の人が、命の危機に晒されている気はしますが。

あ、あそこがゴミ捨て場ですね。

どうやら、先に人が来ていたようです。

「……………おはようございます。新しくこの近くに越してきた、水無月です」

挨拶は、ご近所付き合いの基本です。

「あ、これはどうも初めまして。私はこの近くの教会に間借りさせて頂いている、朝子といいます」

朝子さんですか。

髑髏の仮面で判り辛いですが、引き締まったプロポーションの、色黒の美人さんです。

仮面でも、そのくらいは分かります。

「……………少ししたら、教会の方に挨拶させていただきますね」

「分かりました。今日は私も暇ですし、お待ちしております」

お互いに会釈しながら、分かれる私たち。

で、家に着いてから、新しく会った近所さんのことを六禄さんに話したのですが、

「分体を通して見たが、朝子さんたぶんサーヴァントじゃねえか？ クラスは残ってたアサシンだろうし」

「……………え？」

言われるまで、まったく分かりませんでした。

O n t h e t o p f l o o r .

で、夜になったから、予定通りにランサー陣の根城である、『冬木八
イアットホテル』に来た。
つまり、

「ワ・カ・メ・狩りじゃああああっつっ!!!」

「うおおおおおおおっつっ!!!」

以上、霊体化した俺とジルの掛け声。
今日は二人でカチコミです。

「お、こっから先が、奴らの工房みたいだな」

今俺たちがいるのは、ホテルの31階と32階を結ぶ階段の31階
側。

奴らがいるのは、ホテルの最上階である32階。

どつやら奴らは、そこを全て貸しきって拠点兼工房にしたいらしい。

「いったい、いくら使ったんだろうか？」

「おそらくですが、たいした額ではないはずですよ？」

「黙れ貴族」

「こちらら庶民だ。」

子供を一人育てるのに、いったいいくらかかったかと思ってるんだ。どれだけ大変か分かるか。

「……………騒がしいと思って来てみれば、お前が客人とはな。そこまで俺に御執心か？ 槍使い」

「そういつこった。人妻好きの前髪野郎」

「俺は違うー！」

ジルとはしゃいでたら、ランサーが階段を下りてやってきた。マスターに、迎撃して来いとても命令されたのか？

「それに、そのの……………えっと……………」

「……………なんでしょうか？」

ジルを見て、ランサーの言葉が止まる。

明らかに、何かを言いたいのだが言い澀んでいる感じがした。しょうがない。

「こっちはーっ、

「」のギョロ目は、俺の相方だ」

「ちょっとおっ?!」

俺が言ってるっ。

「……お前、俺が傷つくだろうと思って黙っていたというのに」

「はっ！知ったこっちゃない。そんなことは、どうでもいい」

「良くないですよ!?!何で敵のほうを気を使ってくれてるのですか?!

ま、あつちが騎士だからねえ。

目の前の敵を侮辱するよつなことは、まあできんだらっわ。

「さて、お互いの顔合わせも済んだことだし、さっさと死んでくれないか?」

「ふざけるな。俺は、今生の主に聖杯を捧げると誓ったのだ」

ふうん?

まあ、そんなことはどうでもいいがな。

「我らが聖女に手を出した罪を、悔やむがいいです」

「……おい、ちょっと待てギョロ目。』我らが『?」

「我が友の妻に手を出した罪を、悔やむがいいでしょうっ」

そっ。

それでいいんだ。

「……………お前たち、本当に仲間なのか？」

「もちろん」

「少なからず、今はな。」

「ま、俺としてはお前が惨たらしく死んでくれれば、それでいい」

「お前はどれだけ俺が嫌いなんだ?！」

「惨たらしく、惨めに糞塗れになって死んで欲しいくらいに」

「悪化した?！」

「ククッ！」

人の嫁に手を出したからには、そのくらいになってくれないとなあ。

「さて、いい加減戦つとしよう」

ズボンのポケットから符を取り出し、

『六合大槍』

煙とともに、愛用の槍を取り出す。

うん。
相変わらずデカイね。

「その槍では、この屋内では不利じゃないのか？」

同じ槍使いだから」その、ランサーの言葉。

確かに、ホテルの階段のまん前という、ごく狭い空間では俺の槍は扱いくらいだろう。

だが、

「心配は要らん」

ブンッ！

と、槍を振り回して衝撃波を生み出し、要らない壁や部屋を破壊してスペースを生み出す。

「…無茶苦茶をする」

ああ、それが俺だ。

「さあ、殺し合おう。『ディルムッド・オディナ』」

A vampire and the knight
ht vs . knight .

ガキンッ！キンッ！

と、剣と槍が打ち合う音が響く。

「クッ！その容姿に騙された！まさか、剣が使えるとはな！」

「私の容姿は関係ないでしょう!?!」

そう、今ランサーと打ち合っているのは、スキルである『気』を使用しているジルの方だ。

ここに来るまでに、骨董屋で買ってきた西洋剣に俺の因子を五匹ほど纏わせた物を振るっている。

まあ、

「ほら、そいつばかりに構っていると、俺の槍がぶち抜いちまっぞ！」

「クソッ！」

前方のジルの身体を掻い潜りながら、俺の槍もランサーを穿とつと
するわけだが。

前方に剣を持ったジル、後方には槍を持った俺。

ランサーがジルを突こうとすれば、まずそれをジルが弾き、俺が突く。
俺を突こうとすれば、その懐にジルが入り斬る。
二人を二槍をもって同時に貫こうものなら、

「その黒子、もらったあー！」

「クッ！」

無理な体勢で放たれたそれをいなし、どちらかが一方的に攻撃できる。

この陣形は、ある意味俺たちだからこそ成り立つものだ。
本来、前方に味方のいる状態で槍を突くことは難しい。

それは当たり前だ。

敵の前に味方を突いてしまう可能性のほうが、圧倒的に高いのだから。

だが、俺たちならば心配はない。
なぜなら、

「そおらっっー！」

「ムッ！」

「なっっっ！」

たとえジルの身体を目暗ましにして、その身体ごと貫こうとしても
ジルなら避けられるからだ。

ここは同じ戦場を駆けた仲のなせる業だよね。

いや、別に一緒に戦場で戦ったことはなかったな。

あれか、決闘の時のあれか。

あれでお互いの動きを理解したと。

でも、あの頃は槍を使ってなかったしな。

「いったいどうしてだ」

「何のことが分かりませんが、とりあえずなんとなく分かるだけでも
言っておきましょう」

なるほど、分かりやすいな。

………ジルは、直感のスキルを持っていただろうか？
持っていなかったはずなんだが。

しかしランサー、さすがは英霊だな。

完全に見えない一撃を、こつもあつさり避けるとは。

だが、俺たちの勝ち揺るがない。

震脚を使い、ジルごとランサーの足元を崩してバランスを失ったと
ころを刺し貫いてやる。

はずだった。

擬音化するのも難しいほどの、爆発音。

崩れる足場、視界から消えるジルとランサー。

ここで思い出すことが一つ。

「あ、俺とジルの幸運のランク、二人ともEだったわ」

俺の本来のランクはCだが、少なすぎる魔力供給のせいで落ちてしまっている。

低い、あまりにも低い。

ちなみに、後から知ったことだがランサーの幸運もEランクらしい。

この爆発によるホテルの倒壊のせいで、脱出するのに精一杯だった俺たちの勝負は、有耶無耶のまま終わった。

「死ぬかと思ったな」

「ええ、本当に」

「お客さんたち、もう一本どうだい？俺のおごりだよ」

「お、悪いね親父さん。ありがたく貰うわ」

「ありがとうございます」

「いっつていっつてよー」

以上、帰宅前に寄った屋台での会話。

前髪を逃がしたせいで不味かった酒も、気前の良い親父さんのおかげで、後半は美味かった。

今度は、ジャンヌを連れて行くのか。